

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2011-3

発行日：平成23年4月13日

発行元：（社）計画・交通研究会

目次

Opinion	1
常在戦場	
News Letters	2-7
事業報告・活動報告	
Backyard	8
事務局通信	

□ Opinion

常在戦場

堤 盛人

平成23年東北地方太平洋沖地震が発生した3月11日金曜日の14時46分頃、ちょうど勤務先の筑波大学でこの opinion の原稿を書いていた。大学のある地域の揺れは震度6弱と発表されたが、私がいた10階では床が数十cm横に揺れていたと思う。建物や棚が軋む音、物が落ちる音、ガラスが割れる音が響き、部屋から飛び出して廊下で立っているのがやっとであった。

地震の直後から、マスメディアを通じて『想定外』という言葉は何度見聞きしたことだろうか。地球温暖化問題が本格的に議論される頃から、私達は地球を小さな存在のように感じてきたが、自然の猛威の前には人類が如何にちっぽけな存在かを思い知らされた。万能の神でない私達には想定外は永遠に残る。それでも、今回、多くの専門家がこの言葉を口にせざるを得なかったのは無念でならない。

想定外を想定することは論理矛盾であるが、想定外という言葉が思考停止や人災をもたらせることは決してあってはならない。特に、原子力発電所のような最高レベルの安全性が求められる施設では、想定外の状況が起こった時への周到な準備が求められる。今回の震災では、accident management の重要性を再認識させられた。救援・復旧・復興に取り組む多くの人々や組織の中でも、とりわけ目を引いた自衛隊・米軍の活躍は、日頃「常ニ戦場ニ在ル」が如き状況下で訓練された組織の強みを十分見せつけた。

今回の震災では、至る所で有事への備えが不十分であることが露呈した。中でも、「計画停電」の混乱ぶりは、普段の研究で地理情報システム

(GIS) を使っている私には理解し難い。配電ルートが国家機密に近い重要情報であることを考えても、GISで管理された配電ルートと顧客情報があれば、まともな統制や周知は可能なはずである。この「無計画停電」によってもたらされる損害は、まさに人災と呼ぶに相応しい。

今回の地震で、私の大学では電力会社以上にお粗末な危機管理の実態も明らかとなった。地震の直後、私はすぐに研究室の学生の安否確認を行った。次に、担任をしている2年生のクラスの学生の安否確認をしようとした。ところが、日頃、学生との連絡を大学で管理している e-mail アドレスに頼っていたことから、学内のインターネット・サーバがダウンした状況下では学生の安否確認が容易にできないという問題に直面した。その後も続く大きな余震、ライフラインの復旧遅延、飲食物の確保や原発の問題等が深刻化し、サーバの復旧を待っているような状況にはないことが明白となる中、二十歳そこそこの学生達が皆無事に過ごしているのかは何よりの心配事であったし、彼らの家族にも被災者がいる可能性もあった。翌日になって、携帯電話のメールアドレスを使った安否確認を思い立ち、アドレスの分かった学生からクラスメイトのアドレスを集め、同様の作業を繰り返しながら安否確認を進めた。その日のうちに、クラスの学生約三十名ほぼ全員のアドレスが把握でき、翌日には全員の安否確認が完了した。携帯電話の威力を痛感した。

地震当日、私の職場では部屋に閉じこめられた教員もいた。しかし、これだけの規模の地震

にもかかわらず、個々の教員の安否確認はなされなかった。さらに驚いたことに、所属長から学生の安否確認を行うよう指示があったのは15日の火曜日になってからであり、その時点で学生の安否を即答できるクラス担任教員は私以外には皆無であった。大学の重要な構成員である学生の安否確認を震災後4日も経ってから始めるというお粗末な対応に呆れ、その後も遅々と進まない安否確認には怒りが込み上げた。教員の多くが、サーバが復旧した後になって、メーリングリストにメールを投げて返信が来たものだけを形式的に報告するという対応であったことは容易に想像できる。教育者としての最低限の使命も果たせないような者は大学から去るべきであるとの思いを強くした。

3月11日はこの原稿の締め切りの日であった。実はこの時私は、「増え続ける電柱」と題して我が国の新規住宅開発地で依然増え続ける電柱・架空線に対する思いを執筆していた。数日が経ち、ようやく大学の居室を暫定的に復旧し終えた後、激しい揺れで電源コードが抜けたコンピュータに電源を入れた。書きかけの原稿は残っていないと諦めていたのだが、地震直前の原稿ファイルが残っていた。残りの数百字を書き加え、すぐに提出しなければならなかったが、どうしてもその気になれないまま時間が過ぎてしまった。幹事で大学の同級生でもある中井祐さんに、2月中には入稿しますと偉そうなことを言っておきながら、締め切り当日に原稿

を書いていた私には、本当は「常在戦場」などと書く資格はない。入稿が遅れ、ご迷惑をお掛けした関係者と会員の方々にはこの場を借りてお詫び申し上げたい。

警報・安否・疎開・停電・物不足・復旧・復興…。まさに戦場である。

今回の震災で余りにも多くのものを失ったが、犠牲者の命と引き替えに得た教訓も計り知れない。その教訓を活かすことが犠牲者へ報いることとなり、私達研究者に課された責務である。想定外への備えには、タブーを排除する勇氣も必要である。地域・国土計画で、自衛隊の基地・駐屯地や電子力発電所・送電施設といったことも積極的に考慮する必要があるだろう。復興計画の中では、人々が住み慣れた土地を捨てるという過酷な決断も必要となる。平成5年7月の北海道南西沖地震による大津波に襲われた奥尻島では、壊滅した沿岸地域から高台に移して住宅街を再建し、集団移転をしている。残念ながら、復興が進んだ奥尻島の写真の中には多くの電柱が立ち並んでいる。今回の震災復興では、東北地方の美しい原風景を取り戻すべく、無電柱化への配慮も願いたい。

最後になったが、東日本大震災で被災された会員と関係者の方々に心からお見舞い申し上げますとともに、その後の救援・調査活動に従事されている会員の方々に敬意を表する。

(筑波大学 准教授)

□ News Letters

事業報告・活動報告 □

■2010年11月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅹ講・第13回)

●日時：平成22年11月10日(水) 17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義先生

特別講義：隅田川シンポジウム講演内容

②(有) あいランドスケープ研究所 菅博嗣 氏
絵日記から活用ドラマを拾い出す

●参加者：14名 (うち計交研関係5名)

〔講義概要〕

◆特別講義：隅田川の魅力を探る (2)

前回から目次構成に変更はないが、項目ごとに写真や地図を加えて説明を充実した。

はじめに

隅田川の資源性と市場性が抜群で絶妙であることを示す資料として、以下を例示した。

○日本の都市河川の多くは溪流河川と堤防河川

(盛岡市中津川、東京荒川河口付近 等)

○全国の都市河川は資源性・市場性が劣る

(京都鴨川：溪流河川、大阪淀川：狭い 等)

○隅田川とロンドン・テムズ川、パリ・セーヌ川との比較 (川幅、水の流れが類似)

1. 都市の「顔」

首都である東京には威信と感動と象徴性が必要であるとして、ロンドンはテムズ川とウェストミンスター宮殿 (国会議事堂、時計台)、パリはセーヌ川とエッフェル塔が代表的な風景であることを紹介した。

2. 空間の活力

人間の営みには“空間の活力”が必要であり、その基本は「用・強・美 + 聖」として、古代ローマの水道橋等を紹介した。

3. 隅田川の魅力の創造に向けて

河川の魅力として、川面が視点より下にあり、川面を中間において (つなぎの空間として) 対岸を眺めることが挙げられる。現在の隅田川では、遊歩道が整備された隅田公園が眺望を楽しむ代表的な場所である。

都市軸としての象徴性と物・人の流れ (移動) については、航空写真を見れば理解されるように、隅田川は江戸城の外堀の一角を成し、また、昭和40年代まで舟運による重要な交通路としての機能を果たすなど、江戸及び東京の軸であった。現在では、貨物船の航行は減少しているが、屋形船に代表される遊覧やレジャー用の船が賑わいをみせている。

河川と他の構造物による景観では、橋と塔が象徴的である。ロンドンのタワーブリッジやパリのエッフェル塔は、世界中の誰もが知る代表的な景観である。

隅田川の魅力の一つに、川幅に対して橋と橋の間隔が適切であることが挙げられる。近づきすぎては、橋と橋に挟まれた空間に圧迫感があり、橋の眺めもよくない。

むすび

「大切なことは」として、以下の事項について認識することの重要性を追加した。

- ①川とは何か・・・コンセプト
- ②人間にとって川とは・・・意味論
- ③どうやって実現するか・・・技術論

◆観光企画関連報告7 (菅博嗣)

観光地づくり の 公園づくり 絵日記から活用ドラマを拾い出す

市民参加型で取り組んだ千葉市の「子どもたちの森公園づくり」は、世の中にあふれている制札板だらけの公園はもういらないと考え、「〇〇する」を検討の出発点としてきた。公園には、千葉市との単年度更新契約で市民団体「自然遊びわかばの会」が雇用するプレーリーダーが常駐し、日報の一環として毎日「絵日記」を続けて4年目となった。

所有する時代から活用する時代となってもなお、都市公園は活用しづらい。そこで、公園活用の展開要因を絵日記から見つけようと試みたものである。

〔報告目次〕

- 1. 公園活用の要点を探る 公園の価値を再考する
- 2. 手応えを確かめてみんなで担う
- 3. 実績から大切なことを見つけ出す
- 4. 共担という公園づくり (市民参加の軌跡)

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2010年11月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅹ講・第14回)

●日時：平成22年11月24日(水) 17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義先生

観光原論研究・第2版の概説と修正 (5)

②ヒューマン・エデュケーション・サービス 権代美重子 氏

「もてなし」の視点を拡げて

●参加者：14名 (うち計交研関係6名)

〔講義概要〕

◆観光原論研究・第2版の概説と修正 (5)

Ⅰ 観光の概念 1.1 (1) 構成 (テキストP.1~2)

「(1) 構成」は、主要な時代の断片 (産業革命、戦後、メディアの発展等) について写真と図表を交えて解説する予定であるが、その中で、「観光統計にみる考察」を追加したい。単に増加した、減少したというのではなく、その統計がどのような現象を表し、なぜ増減しているか

等を考える“統計の読み方”について触れたいと思う。

その例として、(財)日本交通公社発行の「旅行年報2010」を題材に解説した。

「旅行年報」は、目次に「第Ⅰ編 旅行者の動き」「第Ⅱ編 観光産業の動き」「第Ⅲ編 観光地の動きと観光政策」とある。第Ⅰ編は“観光者”ではなく“旅行者”となっており、ビジネスでの旅行者も含まれた統計であることを踏まえておく必要がある。観光者だけならば、“余暇での旅行者”となる。ビジネスの旅行者に関しては、商用の合間に観光を行う“兼観光”という概念も重要になる。

「概観」に旅行者数の増減が対前年比で示されており、国民の海外旅行者数は全体で3.4%減、韓国への旅行者数だけ28.4%増とある。全体の減少については、景気後退と新型インフルエンザの流行が影響したとあるが、韓国への旅行の増大には説明がない。その他にも、要因の説明がないまま、特定の地域への旅行の増減が示されている。単に増減を語るのではなく、円高、韓国ブーム、地域特性等々の要因に目を向けることが重要である。

観光産業について、旅行業、宿泊業、運輸業を取り上げているが、これだけでは関係分野が狭いことや、同じ宿泊業であっても観光専門と兼観光があること等が指摘される。チャーター便利用の旅行商品はほぼ観光客として扱えるが、その他の旅行では観光とそれ以外を区分することは難しい。その点を踏まえて、関連産業の動きを見る必要がある。

観光地の動きに関して、スキー場、水浴場の利用が減少しているとあるが、その理由を考えることが重要である。スキーの魅力低下か、流行の変化か、あるいは若年層の人口減少か、時代背景や社会経済状況からの確に判断する必要がある。

◆観光企画関連報告8 (権代美重子)

「もてなし」の視点を拡げて

観光は人々の喜びや生きがいに関わる産業であり、「もてなし」は観光振興の重要なキーワードとなっている。「もてなし」とは、相手を大切に思う気持ちの上に、もてなす側ともてなさ

れる側の双方向的な関係の中で「心豊かな時間」を共に創っていくことと言える。

農耕信仰を起源とする日本のもてなしは極めて意志的であり、風土の中で育まれた美学をもつことが特徴である。「意識的に見せる」ということが重要な要素となっており、「しつらえ」「しかけ」「ふるまい」に「心豊かな時間を共有する」ための心入れを示す。

「もてなしの心によるあこがれの国づくり」とは観光立国のスローガンであるが、精神面や接遇・人的サービスの面ばかりが想起されがちな「もてなし」の視点を拡げ、新たな価値創造をしていくことが求められている。

〔報告目次〕

1. 観光の商品＝心豊かな経験
(価値ある時間消費)
2. 「もてなし」の基本
3. 「もてなし」の起源と意味
4. 「もてなし」の視点を拡げて

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2010年11月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅹ講・第15回)

- 日時：平成22年12月15日(水)17:00～20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義先生
東京工業大学名誉教授 中村良夫先生
宇都宮大学工学部教授 永井護先生
「都市づくり・まちづくりと観光」の討論

- 参加者：18名(うち計交研関係7名)

〔講義概要〕

◆特別討論会：都市・まちづくりと観光

近年、観光は地域活性化の中で重要な位置づけとなり、地方はもとより大都市でも重要なテーマとして扱われてきている。しかし、「観光」という名ばかりが先走っており、「観光の基本」や「観光と地域、都市の関係」などについて、共通の理解や議論が不十分である。こうした問題意識から、「都市・まちと観光の関わり」をテーマに、鈴木先生、中村先生、永井先生に短いご講演を頂くとともに、参加者を交えた討論を行った。

先生方の講演は、目で見ると観る(観る)ことがで

きる「都市・まち」の魅力の考え方・捉え方に関するもので、昨年度から今年度の共催セミナーやシンポジウムで講演されたものを概説して頂いた。紙面の都合で、講演目次のみを掲載した。

1. 隅田川の魅力を探る（鈴木先生）

はじめに 結論：隅田川は、資源性と市場性がともに抜群で絶妙である。よって、新しい“日本の首都としての顔”にしたい。

- (1) 都市の「顔」 東京には新しい顔ができていない。首都東京には、威信と感動と象徴性が必要である。
- (2) 空間の活力 人間の営みには空間の活力が必要であり、基本は、用・強・美+聖。
- (3) 隅田川の魅力の創造に向けて
①景観の構造／②視野と視線／③川面は視点より必ず下／④川は都市軸としての象徴性をもつ／⑤流れ（移動）／⑥夜の川（川面の輝き）／⑦橋と塔の象徴性／⑧以上をどのように構成するか

むすび 隅田川を中心に威信と感動にあふれる“新しい東京の顔”をつくろう。

2. 「まちニハ」からのまちづくり（中村先生）

- (1) 山水都市は入れ子型ニハの錯綜体
- (2) 家ニハとまちニハ 庭へ向けて開いた縁側／町へ向けて開いたまちニハ 軒下の美学／公と私のゆるやかな融合
- (3) 開かれた庭 まちニワを創る 屋敷内に閉じ込められたニワを都市へ解放する／都市はモノではない、場（バ）＝ニワ（ニワ）の錯綜体
- (4) はちニハの条件 ①モノの形→場所の情景／②人の気配、賑わい／③山水の気配／④半閉鎖自由空間／⑤縁からの眺め／⑥回遊による読み取り
- (5) 公領域と私領域をつなぐまちニワ
- (6) さまざまなまちニワ 軒下型／結界型／路地型／水辺型／橋詰型／見晴らし型／町並み形成型／総合型 等

3. 歴史的都市の観光基盤づくり（永井先生）

- (1) 拠点と軸 拠点：賑わいを形成／軸：流れを誘導し街の骨格を形成
- (2) 歴史的都市の保全・活用（ゾーニング）核（歴史的遺産）／重点区域（環境を面的に

保全・育成）／バッファゾーン（重点区域の環境と景観を保証する保全ゾーン）

- (3) 徒歩圏 回遊ルート／ターミナル／アクセス、通過交通／交通管理と情報提供
- (4) 重点地区の歴史的価値 遺産の価値（世界遺産レベル～地域レベル）／様々なレベルの価値の編集、統合／歴史認識の重要性
- (5) 歴史的市街地の基盤づくり 歴史のシナリオから空間布置／ゾーニング、徒歩圏の形成、拠点と軸／保全、整備、情報提供

【主な討論の議題】

- ・道路による街並み形成が制約される現実
－道路とは何か、社会の成熟度
- ・まちづくりにおける法律の先行
- ・安全管理の問題－行政責任、自己責任 等

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2011年1月 計交研・当て塾共催セミナー （第X講・第16回）

●日時：平成23年1月19日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義先生

観光原論研究・第2版の概説と修正（6）

●参加者：15名（うち計交研関係6名）

【講義概要】

◆観光原論研究・第2版の概説と修正（6）

Ⅲ 観光の基礎理論 1.観光の（命題）基礎条件（テキストP.32）

「1.観光の（命題）基礎条件」に、下記の（1）（2）（3）（5）を追加した。（4）と（6）はこれまでと同じである。

（1）資源と対象及びその保続性

「資源」は可能性のあるものであり、一般公開されることで「観光対象」となる。

次の世代へ継承していくという原則から、観光対象には保続性が不可欠である。保続性とは維持管理が可能で消失されないことであり、対象化を図る際には入場規制等のコントロールが必要である。

資源・対象の大分類は、以下のようである。

- ①自然：スイス、国立公園、天然現象 等々
- ②歴史：イタリア、奈良、京都 等々

③文化：現在の生き様、伝統、風俗 等々

(2) 接近—回遊—帰還

対象へ接近（アクセス）して、回遊して、帰ってくるのが観光の原点である。例えば、新幹線により首都圏と直結するというアクセスが重視される。また、回遊式庭園はもちろんのこと、美術館でも回遊がある。

接近から帰還までの一連の観光行動は、1日24時間という持ち時間の中で、また、朝・昼・夕・夜が繰り返す周期の中で展開される。そして、生活のリズム（緊張と休養／移動、休憩、飲食、宿泊等）が伴い、他の余暇活動に比べて長い時間を費やす。

到達する基本距離が長くなれば、回遊の半径は大きくなる（ラケット理論）。これらが、観光の基本的な原理である。

(3) 安心・安全

タイタニック号沈没事故（1912年）、エジプト外国人観光客襲撃事件（1997年）、ケーブルカー・トンネル内火災事故（2000年）等々、観光地での事件・事故は多々ある。

治安が保たれ事故がない安心で安全な観光地であることが基本的な条件である。

(4) 観光現象のいろいろな条件（抵抗）

観光は条件が複雑であり、観光行動が出現するときには様々な抵抗がある。具体的な内容は計画論になるかと思うが、ここでは重要な項目について列挙する。

◇時間抵抗（到達時間）：文明により変化

◇費用抵抗（料金）：大量・大衆化による低廉化

◇接遇抵抗（もてなし：ハード、ソフト）

◇経過（経験）、間、なじみ、馴れ

◇密度抵抗（混雑）：快適なアクセス

(5) 普及と大衆化・大量化

昭和4年に東武日光駅が開設され、浅草—日光間が2時間余りで結ばれた。その2・3年後に日光の観光客は年間100万人を超えたと言われる。文明により利便性、快適性などが向上し、観光の大衆化、大量化が進む。このような事象について、古い統計などを用いて概説する。

(6) 観光者の選択条件

観光者の中には、乗り物に乗ることや移動そ

のものを目的とする人がいるが。これは、幼児のうち男子の多くが乗り物に興味を示すことに関係していると思われる。このように、個人の好み、嗜好、趣味を“個人差”としてではなく、“社会集団の選択条件”として捉えることが重要である。

観光では個人の選択により決定されるとい要素が大きいことから、心理学や社会心理学の分野の成果などを応用して、観光者の選択の問題を整理する必要がある。

◇好み、嗜好、趣味

◇回遊指向／能力（ソフト）／我慢（登山等）

◇移動手段／無抵抗ゾーン（徒歩では500～800m程度）等

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2011年2月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅹ講・第17回）

●日時：平成23年2月4日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

宇都宮大学工学部 教授 永井護先生

日建設計シビル・ベトナム 佐藤源治氏

ベトナムの都市開発の現状と課題

●参加者：26名（うち計交研関係10名）

〔講義概要〕

1. ベトナムの社会・経済状況

ベトナムは、面積約33万Km²、人口約8,800万人（2009年）であるが、過去10年間の人口増加は13%を超え、急激な人口増、都市化が進んでいる。日本の昭和30年代後半の状況に近いと言える。

面積・人口	33万Km ² 、8,800万人、増加率1.3%/年
都市人口比	29.8%（2009年）
GDP	849億ドル、成長率6.3%（2008年）
地方体制	省レベル（第一級行政区） 県レベル（第二級行政区） 町村レベル（第三級行政区）の3層
課題	・インフラ不足 ・都市化のプロセスと環境問題 ・都市計画の質の軽視 ・経済成長を上回る人口増加 等

2. 都市計画の仕組み

(1) 土地に関する制度

ベトナムでは個人に土地の所有権はなく（国が管理）、土地の使用権が取引される。その制度は、中国の制度に類似している。

土地所有権	すべて人民に帰属し国家が管理(実質は国有)
土地使用権	交換、譲渡、賃貸、転貸、相続、贈与、抵当、担保、寄付の権利
土地使用権の取引	①原則無償の交付(割り当て)、②有償の交付、③有償の賃貸、④土地使用者間での転讓(都市開発は一般的に②のタイプ)

(2) 地域・都市の開発制度

国全体の開発計画は、経済社会計画、土地利用計画、建設計画の三本柱で構成される。都市の計画は、建設省所管の「建設計画（マスタープラン）」に位置づけられ、全国、地域（地方）レベル、県・都市レベルがある。県・都市レベルの計画は、一般建設マスタープランと詳細計画に分けられる。

開発の許可に関しては、第一に投資承認があり、第二に計画承認、最後に土地交付の手続きとなる。

計画体系	「経済社会発展計画」(計画投資省) 「土地利用計画」(自然資源環境省) 「建設計画(マスタープラン)」(建設省) *相互の調整はなし
都市部の計画の段階	①国家都市開発マスタープラン方針 ②地域建設マスタープラン ③一般建設マスタープラン(都市全体) ④詳細建設マスタープラン(地区) ⑤詳細建設マスタープラン(敷地)
開発の手続き	①投資承認(投資計画部局) ②建築計画承認及び建築許可(都市計画・建設部局) ③土地交付手続き(土地部局) ・1年半から2年を要す。手続きのコストも高い。

(3) 問題点

三本柱の計画が整合性に欠けること、理想的な供給を求めて実態と乖離した目標設定を行う、財政的な裏付けがない、スプロール化をコントロールできないなどの問題がある。

このため、2010年に「都市計画法」が新たに制定された（建設法の一部が独立）。

共通	・理想を求めた供給型で、非現実的な目標設定 ・需要分析等の経済財政分析に基づいていない。等
経済社会計画	・重工業用地の確保に偏重。 ・急速な都市化に対応できていない。等
土地利用計画	・建設計画に土地利用計画が考慮されない。等
建設計画	・策定の実態はトップダウン、市民参加が表面的。 ・予算措置を伴った短期実施プログラムに結びつかない。 ・既成市街地では正規の手続きによらないことが多い。等

3. 開発事例

1人当たりのGDPが1千ドルを超えた2008年頃から、ベトナム国内は沸騰したような状況にあり、様々な開発プランが出てきている。その一例として、2006年から5年間に日建設計シビルで行った業務の幾つかを紹介した。計画レベルは、基本計画である。

①VinhPhuc省 VinhPhuc市の都市計画
(2030年まで、318km²)

②YenBinh複合都市土地利用計画
(s=1/2,000, A=8,000ha)

③ChanMay新都市及びハイテクパーク土地利用計画
(s=1/2,000, A=3,000ha)

④ChanMay港計画 (s=1/2,000)

⑤CoCo川沿線土地利用計画
(1/2,000 A=3,000ha)

⑥ラオス/ビエンチャン市の開発計画案件

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■ 通常総会の開催のお知らせ

今回の東日本大震災では、幾多の方々が悲惨な被災に遭われ、日々報道・報告される誠に深刻な事態に接し、心よりお見舞い申し上げます。このような中ではありますが、通常総会を下記の通り開催いたします。なお、例年行なっております総会後の懇親会は中止し、今回は東日本大震災に関する講演および意見交換の会を開催しますので、万障お繰り合わせの上、ご出席たまわるようお願い申し上げます。

I 通常総会

日時・場所 平成23年4月21日（木）
 18:00-18:30
 於：主婦会館プラザエフ（JR四谷駅麹町口前）8Fスイセンの間
 千代田区六番町15
 電話 3265-8111

議案

- 第1号議案 平成22年度事業報告および収支決算に関する件
- 第2号議案 平成23年度事業計画および収支予算に関する件
- 第3号議案 役員等の任命の件
- その他の件

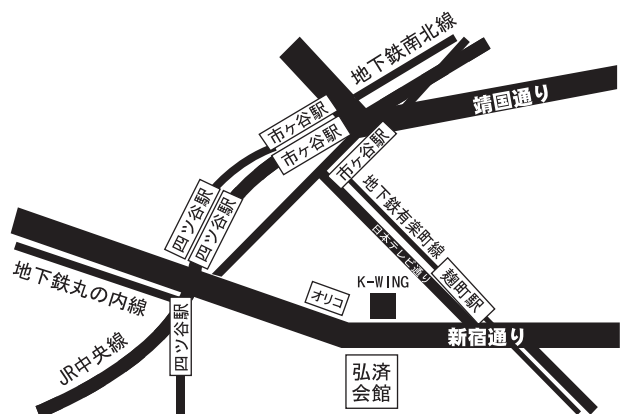
II 東日本大震災に関する講演・意見交換の会

18:30-20:00 8Fスイセンの間
 (軽食と飲物を用意します。会費¥1,000)
 家田副会長により、震災状況についての講演
 森地会長により、復興政策についての講演
 出席される会員との意見交換

(社) 計画・交通研究会

会長 森地 茂
 副会長 石田 東生
 副会長 家田 仁
 副会長 屋井 鉄雄
 事務局長 水野 高信
 会報編集委員長 中井 祐

〒102-0083
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
 TEL=03-3265-1774
 FAX=03-3221-5489
 E-Mail=
jimukyoku@keikaku-kotsu.org
 Homepage =
<http://www.keikaku-kotsu.org/>



(社) 計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。